

感謝表現の使い分けに影響する要因： 場面想定法を用いた研究¹⁾

A Factor Influencing Expression of Gratitude: A Vignette Study

佐久間 勲*
Isao SAKUMA

要旨：感謝表現の主要なタイプには、感謝型（例：ありがとう）と謝罪型（例：すみません）の2種類がある。本研究の目的は、これらの2つの感謝表現の使い分けに影響する要因を明らかにすることであった。場面想定法を用いた2つの研究では、感謝表現をするべき相手が費やしたコスト（以下、コスト）と、感謝表現をする相手との親密度（以下、親密度）の2つの要因を操作して、感謝表現の使い分けが生じるかを検討した。その結果、研究1、研究2のいずれにおいても謝罪型と比較して、感謝型の使用の割合が高かったものの、研究1では、親密度低条件は、親密度高条件と比較して、謝罪型を使用する割合が高かった。研究2では、コスト大条件は、コスト小条件と比較して、謝罪型を使用する割合が高かった。さらに、場面の認知と感謝表現の使い分けの関連を分析した結果、研究1では、他者に対して申し訳ないと感じているほど謝罪型を使用していた。以上の結果は、コストと親密度が感謝表現の使い分けに影響すること、そして申し訳なさなどの他者に負い目を感じる感情が謝罪型の使用につながることを示唆している。

キーワード：感謝表現, 感謝型, 謝罪型, コスト, 親密度

1 問題

本研究の目的は、岡本（1992a）が指摘する感謝表現の主要なタイプである感謝型（例：ありがとう）と謝罪型（例：すみません）の使い分けに影響する要因を明らかにすることである。

1.1 感謝表現のタイプ

岡本（1992b）は、感謝を「他者の何らかの行動が話し手に何らかの利益をもたらした場合に、お返しとして行われる言語コミュニケーション」と考えている。熊取谷（1991）は、感謝はある人物（感謝の話し手）に満足感や心地よさなどの快適状況が生じたと判断し、これを生起せしめた人物（感謝の受け手）に向けて遂行される発話行為であるととらえた。そして快適状況の生起

* さくま いさお 文教大学情報学部

は、感謝の話し手と感謝の受け手との間に、ある種の不均衡（「負い」）をもたらし、その不均衡を修復するための方策として感謝があると論じている。

感謝を表現する方法にはさまざまなものがあるが、佐久間（1983）はそれらを次の4つに分類している。第一に、慣用的な定型表現をそのまま使用するものである（例：「ありがとう」「すみません」）。第二に、受けた利益について指摘することにより感謝の気持ちを表現するものである（例：「長い間いろいろとお世話になりました」）。第三に、利益や好意を受けた話し手の喜びや恐縮の気持ちを述べるものである（例：「本日はこのような送別会を開いていただき、本当にうれしく、幸せに思っております」）。そして第四に、喜びからくる興奮や緊張のために感謝の表現がはじめからもしくは途中から音声にならない言葉にならない表現である。

これら4つのうち、最初に挙げた慣用的な定型表現にはさまざまなものが含まれている。そのなかでも主に使用されるものが「ありがとう（ございます）」と「すみません」であろう。岡本（1992a）は前者を言語内容として感謝を表明していると考えて「感謝型」、後者を言語内容としては謝罪を表明していると考えて「謝罪型」としている。本来の意味を考えると、感謝表現としては当然、感謝型が使用されるはずである。しかし感謝を表明する場面では、感謝型ではなく謝罪型が使用されることもある。NHK 放送文化研究所の調査でも、「自分の落としたハンカチを見知らぬ人が拾ってくれたときのお礼のことばは」という質問に対して、「『すみません』と言うのがふさわしい（『ありがとう（ございます）』はふさわしくない）」と回答した人が5.4%、「両方とも問題ないが、どちらかといえば『すみません（でした）』のほうがよりていねいな言い方である」と回答した人が2.9%であった（塩田，2012）。こうした調査結果からも、一定の割合の人が感謝表現として謝罪型を使用する（または使用することがふさわしいと考えている）ことがうかがえる。

1.2 感謝表現の使い分けに関する研究

感謝表現の主要なタイプである感謝型と謝罪型は、岡本（1992a）も指摘する通り、ランダムに使用されているわけではない。対人関係や状況要因の影響を受けて、システマティックに使い分けられているという。

佐久間（1983）は、感謝表現に関して、何に重きを置くかによって、その使い分けが生じると考察している。そして、「喜び」の気持ちの表明に重きを置いた場合、「ありがとう（ございます）」（感謝型）が使用されやすい一方で、「恐縮」の気持ちの表明に重きを置いた場合、「すみません」「恐れ入ります」（謝罪型）が使用されやすいと論じている。

岡本（1992a, 1992b）は感謝型と謝罪型の使い分けに関する要因として、次の4つを指摘している。第一に、感謝を表明すべき相手の事前のコストである。第二に、相手の行動が一方向的に話し手に利益をもたらす恩恵状況（例：ピアノの伴奏を頼んだところ快諾してもらった）か、相手が事前に話し手に何らかの負債、不利益を与えており、それを修復するために相手が行動した補償状況（例：相手が借金を返してくれた）かの違いである。第三に、相手の行動が話し手の依頼（例：無理を言って待っていてもらった）に基づくか、それとも自発的なものであるか（例：先に帰ってもいいと言ったが待っていてくれた）の違いである。そして第四に、感謝をすべき他者と親しいかどうかという人間関係の親疎（親密度）である。以上の4つの要因を指摘した後に、岡本（1992a, 1992b）は4つの要因が異なるさまざまな状況において、話し手が感謝を表明すべき相手に対してどのような感謝表現を使用するか検討した。その結果、第一に相手が費やしたコストが大きいと感じられる状況では、そのコストに配慮するために、謝罪型が多用されること、

第二に、親密度が低い相手に対しては、配慮する必要性が大きくなるために、謝罪型が多用されることを見出している。感謝表現の研究ではないが、蔵永・樋口（2011）も他者に負荷がかかったことによって個人が間接的に支援を受ける状況（例：学生用共同研究室で大量にたまったゴミを他の人が一人で捨てて行った）で、人が「すまなさ」「申し訳なさ」「恐縮」といった感情を経験することを見出している。こうした研究結果も、コストが大きいと感じられる状況では、相手が費やしたコストに配慮するために、謝罪型の使用につながるという解釈を支持するものであろう。

岡本（1992a, 1992b）は感謝表現の使い分けに影響する4つの要因を指摘し、それらのうちコストと親密度が感謝表現の使い分けに影響することを見出した。本研究は、岡本（1992a, 1992b）で得られた研究結果が頑健なものであるかを確認するために、コストと親密度の2つの要因のみを操作して、感謝表現の使い分けが生じるか検討する。

1.3 本研究の仮説

岡本（1992a, 1992b）の研究結果に基づき、以下の2つの仮説を検証する。第一に、相手が費やしたコスト（以下、コスト）に関する仮説である。コストが小さいと認知しているほど感謝型を使用する一方、コストが大きいと認知しているほど、謝罪型を使用するだろう。第二に、相手との親密度（以下、親密度）に関する仮説である。親密度が高いほど感謝型を使用する一方、親密度が低いほど謝罪型を使用するだろう。以上の2つの仮説を検証するために、本研究では場面想定法を用いた研究を実施した。

2 研究1

2.1 目的

コストと親密度の2つの要因を操作し感謝表現が変化するか、場面想定法を用いて検討する。

2.2 方法

(1) **実験参加者** 文教大学で社会心理学関連の授業を受講している大学生61名を対象に実験を実施した。

(2) **実験計画** コスト（小／大）×親密度（低／高）の2要因計画であった。2つの要因はいずれも実験参加者間要因であった。実験参加者は、いずれかの条件にランダムに配置された。各条件に配置された実験参加者は15名ないしは16名であった。

(3) **実験材料と手続き** 実験は授業内の一部の時間を使用して集団で実施した。実験では、実験参加者に自分自身が大学キャンパス内で落としたりした財布を同性の人物に拾ってもらおうという架空の場面が描かれたシナリオを読んでもらい、いくつかの質問に回答してもらった。回答は各自のペースで行った。シナリオのなかでは、コストと親密度の2つの要因が操作されていた。コストの要因については、すぐそばにいた人物が財布を拾うか（コスト小条件）、後ろにいた人物が雨の中で両手の荷物を置き、傘をとじて財布を拾い、さらに走って届けてくれるかで操作した。親密度の要因については、財布を拾ってくれた人物は単に学生か（親密度低条件）、友人か（親密度高条件）で操作した。実験参加者はコストと親密度の要因が組み合わされた4種類のうちの1つのシナリオを読んだ後に、その場面で財布を拾ってくれた人物に、どのような感謝表現をすると思うか回答してもらった。回答の方法は二択で1つは感謝型（ありがとうございます [親密度低条件] / ありがとうございます [親密度高条件])、もうひとつは謝罪型（すみません [親密度低条件] /

ごめん [親密度高条件]) であった。その後、操作チェックを含む場面の認知を測定する質問項目 (8項目、5件法) に回答をしてもらい、実験は終了した。

2.3 結果と考察

(1) **操作チェック** 実験参加者が場面をどのように認知していたかを検討するために、場面の認知を測定する8項目について条件ごとの平均値を算出した (表1)。このうちコストと親密度の要因の操作の有効性を確認するために、「財布を拾うことは負担だった」「相手は私と仲のよい人だ」の2項目の平均値に関して、コスト×親密度の分散分析を実施した。その結果、「財布を拾うことは負担だった」については、コストの主効果のみ有意であった ($F(1, 57) = 12.30, p < .01$)。コスト大条件は、コスト小条件と比較して、財布を拾うことは負担だったと認知していた (コスト大条件=3.48 vs コスト小条件=2.40)。「相手は私と仲のよい人だ」については、親密度の主効果のみが有意であった ($F(1, 57) = 87.76, p < .001$)。親密度高条件は、親密度低条件と比較して、相手は自分と仲のよい人だと認知していた (親密度高条件=4.17 vs 親密度低条件=2.35)。これらの結果は操作と一致した方向での差であり、操作が有効であったことを示している。

(2) **場面の認知** 操作チェック項目以外の6項目に関しても、コスト×親密度の分散分析を実施した。その結果、「相手に対して気楽に思う」「ありがたいと思う」「申し訳ないと思う」「相手に迷惑をかけた」「相手にとって重要なことである」「自分にとって重要なことである」の6項目でコストの主効果が有意であった ($F_s > 5.83, p_s < .05$)。コスト大条件は、コスト小条件と比較して、財布を拾ってくれたことに対してありがたい、申し訳ない、相手にとっても自分にとっても重要なことであると思ひ、財布を拾ってくれた相手に対して迷惑をかけたと思っていた。さらにコスト小条件は、コスト大条件と比較して、財布を拾ってくれた相手に対して、気楽さを感じていた。加えて「相手に対して気楽に思う」で親密度の主効果が有意であった ($F(1, 57) = 12.56, p < .01$)。親密度高条件は、親密度低条件と比較して、財布を拾ってくれた相手に対して気楽さを感じていた。

(3) **コストと親密度が感謝表現に及ぼす影響** コストと親密度が感謝表現の使い分けに影響す

表1 場面の認知に関する平均値 (標準偏差)

	コスト小		コスト大	
	親密度低	親密度高	親密度低	親密度高
財布を拾うことは負担だった	2.47 (0.99)	2.33 (1.05)	3.31 (1.40)	3.67 (1.35)
相手は私と仲のよい人だ	2.07 (0.88)	4.20 (0.68)	2.63 (0.72)	4.13 (0.74)
相手に対して気楽に思う	2.53 (0.92)	3.47 (0.74)	2.00 (0.63)	2.53 (0.92)
財布を拾ってくれたことに対して ありがたいと思う	4.60 (0.63)	4.47 (0.64)	5.00 (0.00)	5.00 (0.00)
財布を拾ってくれたことに対して 申し訳ないと思う	3.40 (0.91)	3.47 (0.83)	3.75 (1.13)	4.27 (0.46)
相手に迷惑をかけた	3.20 (0.94)	2.80 (1.15)	3.94 (0.77)	4.27 (0.59)
財布を拾うことは相手にとって 重要なことだ	2.80 (1.21)	2.40 (0.74)	3.13 (1.09)	3.40 (1.18)
財布を拾ってくれたことは 私にとって重要なことだ	3.53 (1.19)	3.27 (1.10)	4.75 (0.58)	4.67 (0.62)

注) 範囲は1~5。値が大きいほど、各質問項目に対して「そう思う」程度が強いことを意味する。

表2 コスト×親密度×感謝表現のクロス表

	コスト小		コスト大	
	親密度低	親密度高	親密度低	親密度高
感謝型	10	14	7	13
謝罪型	5	1	8	2

注) 数字は度数。無回答が1名いた。

るか検討するために、コスト×親密度×感謝表現の3元クロス表を作成した(表2)。このクロス表について、対数線型分析を実施した。その結果、感謝表現の主効果($\chi(1)^2=13.59, p<.001$)、親密度×感謝表現の交互作用効果($\chi(1)^2=9.03, p<.001$)が有意であった。感謝表現の主効果は、感謝型が謝罪型よりも多かったことによるものであった(感謝型=73% vs 謝罪型=27%)。親密度×感謝表現の交互作用効果は、親密度高条件よりも親密度低条件で感謝型の割合が小さくなり、逆に謝罪型の割合が大きくなったことによる(親密度高条件: 感謝型=90%、謝罪型=10% vs 親密度低条件: 感謝型=57%、謝罪型=43%)。つまり親密度が低くなると感謝型の使用が減少する一方で、謝罪型の使用が増加していた。しかし、コストが感謝表現に及ぼす影響については確認できなかった。これらの結果は、親密度の影響に関する仮説2のみを支持するものであった。本研究では1つの場面だけを使用して場面想定法による実験を実施した。コストの影響は本研究とは別の場面で表れる可能性も考えられる。

(4)場面の認知と感謝表現の関係 場面の認知に応じて感謝表現の使い分けが生じるか探索的に検討するために、場面の認知の8項目と感謝表現の間の順位偏相関係数を算出した。このときに感謝表現は感謝型を“1”、謝罪型を“2”として偏相関係数を算出した。場面の認知に関する1項目と感謝表現との偏相関係数を算出するとき、偏相関係数を算出する項目以外の7項目の場面の認知に関する項目を統制した。その結果、「申し訳ないと思う」と感謝表現との間の偏相関係数が有意傾向($r(51)=.26, p<.10$)、「仲のよい人だ」と感謝表現との間の偏相関係数($r(51)=-.41, p<.01$)が有意であった。他者に対して申し訳ないと感じているほど謝罪型の使用が多くなる一方で、仲のよい相手に対しては感謝型の使用が多くなっていた。申し訳ないと感じているほど謝罪型を使用するという傾向は佐久間(1983)の理論的考察に沿う結果であり、謝罪型の使用の背後には「恐縮」「申し訳なさ」などの負い目の感情が存在していることを示唆するものである。

3 研究2

3.1 目的

研究1に引き続き、コストと親密度の2つの要因を操作し感謝表現が変化するか、場面想定法を用いて検討する。研究1からの主な変更点は次の2点である。第一に、シナリオの変更である。第二に、感謝表現の回答方法の変更である。研究1では感謝表現の回答は2択(感謝型と謝罪型)であった。研究2では回答の制約が少ない方法として、感謝表現を自由記述してもらった。

3.2 方法

- (1)実験参加者 一橋大学で「心理学」を受講している大学生83名を対象に実施した。
- (2)実験計画 コスト(小/大)×親密度(低/高)の2要因計画であった。2つの要因は必ず

れも実験参加者間要因であった。実験参加者はいずれかの条件にランダムに配置された。各条件に割り当てられた実験参加者は19名から22名であった。

(3) **実験材料と手続き** 実験は授業内の一部の時間を使用して集団で実施した。実験では、アルバイト先で、同性で同年齢の人物にコーヒーを入れてもらうという架空の場面が描かれたシナリオを実験参加者に読んでもらい、いくつかの質問に回答してもらった。回答は各自のペースで行った。シナリオのなかでは、コストと親密度の2つの要因が操作されていた。コストの要因については、相手がコーヒーを飲むついでにコーヒーを入れてくれるか（コスト小条件）、コーヒー豆が切れていたために相手が違う部屋にあるコーヒー豆を取りに行きコーヒーを入れてくれるか（コスト大条件）で操作した。親密度の要因については、コーヒーを入れてくれた相手が1週間前に知り合いになったばかりの人か（親密度低条件）、昔からの友人であるか（親密度高条件）で操作した。実験参加者はコスト×親密度の要因が組み合わせられた4種類のうちの1つのシナリオを読み、その場でコーヒーを入れてくれた人物に対する発言を自由に書いてもらった。²⁾ その後、操作チェックを含む場面の認知を測定する質問項目（9項目、5件法）に回答してもらい、実験は終了した。

3.3 結果と考察

(1) **操作チェック** 実験参加者が場面をどのように認知していたかを検討するために、場面の認知を測定する9項目について条件ごとの平均値を算出した（表3）。コストと親密度の要因の操作の有効性を確認するために、「コーヒーを入れてくれることは負担だった」「相手と親しい間柄である」の2項目の平均値に関して、コスト×親密度の分散分析を実施した。その結果、「コーヒーを入れてくれることは負担だった」については、コストの主効果のみ有意であった（ $F(1, 79) = 24.88, p < .001$ ）。コスト大条件は、コスト小条件と比較して、コーヒーを入れてくれることは負担だったと認知していた（コスト大条件 = 3.07 vs コスト小条件 = 1.86）。「相手と親しい間柄である」については、親密度の主効果のみが有意であった（ $F(1, 79) = 87.76, p < .001$ ）。親密度

表3 場面の認知に関する平均値（標準偏差）

	コスト小		コスト大	
	親密度低	親密度高	親密度低	親密度高
コーヒーを入れてくれることは負担だった	2.00 (0.95)	1.73 (0.98)	3.26 (1.15)	2.90 (1.34)
相手と親しい間柄である	2.62 (0.97)	4.55 (0.74)	2.58 (0.96)	4.43 (0.98)
気楽さを感じる相手である	3.19 (0.93)	4.59 (0.73)	2.68 (0.95)	4.05 (0.86)
コーヒーを入れてくれたことに対してありがたみを感じた	4.48 (0.75)	4.18 (0.85)	4.58 (0.69)	4.67 (0.58)
相手に対して迷惑をかけた	2.33 (0.97)	1.86 (0.83)	3.47 (1.17)	3.43 (1.03)
相手は気分を害した	1.52 (0.60)	1.36 (0.49)	1.74 (0.56)	1.86 (0.65)
私は相手にコーヒーを入れてもらっておかしくない立場である	2.67 (1.06)	3.36 (1.18)	2.26 (1.19)	2.52 (1.03)
相手は私にコーヒーを入れるべきである	1.67 (0.66)	1.32 (0.65)	1.79 (0.98)	1.86 (0.79)
コーヒーを入れてもらうことは私にとって重要なことである	2.48 (1.12)	2.27 (1.03)	2.00 (0.82)	2.19 (1.08)

注) 範囲は1～5。値が大きいほど、各質問項目に対して「そう思う」程度が強いことを意味する。

高条件は、親密度低条件と比較して、相手が自分と親しい間柄だと認知していた（親密度高条件=4.49 vs 親密度低条件=2.60）。これらの結果は操作と一致した方向での差であり、操作が有効であったことを示している。

(2)場面の認知 操作チェック項目以外の7項目に関しても、コスト×親密度の分散分析を実施した。その結果、「気楽さを感じる相手である」「コーヒーを入れてくれたことに対してありがたいと感じた」「相手に対して迷惑をかけた」「相手は気分を害した」「私は相手にコーヒーを入れてもらっておかしくない立場である」「相手は私にコーヒーを入れるべきである」の6項目でコストの主効果が有意もしくは有意傾向であった ($F_s > 3.38, p_s < .10$)。コスト大条件は、コスト小条件と比較して、コーヒーを入れてくれたことに対してありがたいと思い、コーヒーを入れてくれた相手に対して迷惑をかけた、気分を害したと感じ、気楽さを感じていなかった。さらにコスト小条件は、コスト大条件と比較して、自分はコーヒーを入れてもらっておかしくない立場であると思う一方で、コスト大条件は、コスト小条件と比較して、相手が自分にコーヒーを入れるべきだと思っていた。「相手にコーヒーを入れてもらっておかしくない立場である」「相手に気楽さを感じる」の2項目で親密度の主効果が有意もしくは有意傾向であった ($F_s > 3.80, p_s < .10$)。親密度高条件は、親密度低条件と比較して、自分はコーヒーを入れてもらっておかしくない立場であると思い、コーヒーを入れてくれた相手に対して気楽さを感じていた。

(3)コストと親密度が感謝表現に及ぼす影響 感謝表現の自由記述については、社会心理学を専攻する大学生1名と本研究者が独立してコーディングを行った。自由記述は、感謝型、謝罪型、その他の3つにコーディングを行った。自由記述に複数のものが含まれている場合、最初に出てきたものを対象にコーディングを行った。コーディングの一致率は100%であった。コーディングの結果、その他に分類された表現はなかった。コスト×親密度×感謝表現の3元クロス表を作成した(表4)。この3元クロス表に対して、対数線形分析を実施した。その結果、感謝表現の主効果 ($\chi(1)^2 = 36.63, p < .001$)、コスト×感謝表現の交互作用効果 ($\chi(1)^2 = 7.90, p < .001$)が有意であった。感謝表現の主効果は、感謝型が謝罪型よりも多かったことによるものであった(感謝型=82% vs 謝罪型=18%)。コスト×感謝表現の交互作用効果は、コスト小条件よりもコスト大条件で感謝型の割合が小さくなり、逆に謝罪型の割合が大きくなったことによるものであった(コスト小条件:感謝型=93%、謝罪型=7% vs コスト大条件:感謝型=70%、謝罪型=30%)。つまりコストが大きくなると感謝型の使用が減少する一方で、謝罪型の使用が増加していた。親密度が感謝表現に及ぼす影響については見られなかった。これらの結果は仮説1のみを支持する結果であった。コストについては、研究1と比較して、条件間の操作チェック項目の平均値の差異が大きくなったために、影響した可能性が考えられる。他方で親密度については、研究1と比較して操作チェック項目の平均値も高く、条件間の平均値の差異も大きかったが、その影響は見られなかった。この点に関しては、研究1と研究2で使用した場面の違いによる可能

表4 コスト×親密度×感謝表現のクロス表

	コスト小		コスト大	
	親密度低	親密度高	親密度低	親密度高
感謝型	20	20	13	15
謝罪型	1	2	6	6

注) 数字は度数。

性も考えられるが、現在のデータからは具体的にどのような違いが原因であるか特定することは困難である。

(4)場面の認知と感謝表現の関係 研究1と同様に場面の認知に応じて感謝表現の使い分けが生じるかを探索的に検討するために、場面の認知の9項目と感謝表現の間の順位偏相関係数を算出した。その結果、場面の認知に関するすべての項目と感謝表現との間に有意な相関は見られなかった。

4 総合考察

本研究の目的は、岡本(1992a)が指摘する感謝表現の主要なタイプである感謝型(例:ありがとう)と謝罪型(例:すみません)の使い分けに影響する要因を明らかにすることであった。具体的には、コストおよび親密度の2つの要因が感謝表現の使い分けに影響するか検討することであった。その結果、全体として感謝型の使用の割合が高かったものの、研究1では、親密度が感謝表現の使い分けに及ぼす影響が見出された。相手との親密度が低くなるほど感謝型の使用が少なくなる一方、謝罪型の使用が多くなっていた。さらに相関分析から相手に対して申し訳ないと感じているほど謝罪型の使用が多くなっていた。研究2では、研究1と同様に、全体として感謝型の使用の割合が高かったものの、コストが感謝表現の使い分けに及ぼす影響が見出された。コストが大きくなるほど感謝型の使用が少なくなる一方、謝罪型の使用が多くなっていた。

コストおよび親密度が感謝表現の使い分けに影響するという結果は、岡本(1992a, 1992b)と一致する結果であり、これらの2つの要因が感謝表現の使い分けに影響することを示唆している。さらに相手に対して申し訳ないと感じているほど謝罪型の使用が多くなるという結果は、佐久間(1983)の理論的考察や、岡本(1992a, 1992b)の実証的研究の結果と一致するものであった。謝罪型の使用の背後には、相手に対する「申し訳なさ」「恐縮」などの負い目に関する気持ちがあることを示唆している。

本研究で得られたデータに基づいて考えると、感謝をする場面では、基本的には「ありがたさ」という感情を持つために感謝型が優先的に使用されるが、その場面で相手に対して「申し訳なさ」などの負い目の感情が加わると、謝罪型が使用されるようになるという過程が想定される。ただし感謝型が謝罪型に優先して使用されることを直接支持するデータは本研究では得られていない。

最後に本研究の問題点と今後の課題について述べる。

第一に、感謝型が謝罪型に優先するという解釈の問題である。前述の通り、感謝型が謝罪型に優先するという解釈を直接支持するデータは得られてない。この解釈の妥当性を検討するために、さらなる研究が必要であろう。

第二に、感謝表現の分析方法に関する問題である。研究2では自由記述を用いて感謝表現を測定した。感謝表現の分析では、「ごめんね。ありがとう。」のように感謝型と謝罪型の複数の表現が記述されている場合は、最初に出てきた表現が重要であると考えて、最初の表現のみをコーディングの対象とした。しかし、熊取谷(1991)は単一の発話内で感謝型と謝罪型の2つの表現を使用することを併用現象と呼び、併用現象には独特の機能があることを指摘している。こうした指摘から考えると、複数の感謝表現についても最初の表現のみを分析するのではなく、複数の表現が果たす機能を理解した上で分析をする必要もあるだろう。

第三に、研究方法に関する問題である。本研究では場面想定法を用いた研究を実施し、その結果を報告した。しかし場面想定法による研究は、実験室実験による研究と比較して、個人の信念や社会的規範が回答に強く影響する、すなわち実際の行動を反映していないという指摘がある(沼崎・工藤, 2003)。こうした指摘に基づいて考えると、今後の研究では実際の行動(感謝表現)を測定し、コストと親密度が感謝表現の使い分けに影響するか検討する必要もあるだろう。

注

- 1) 本論文は、日本心理学会第71回大会、日本心理学会第72回大会にて発表された内容を加筆修正したものである。
- 2) シナリオの文中の空欄にコーヒーを入れてくれた相手に対する自分の発言を書き込む形になっていた。具体的には、「…。コーヒーを入れてくれたAさんに対して、あなたは『』と言いました。」となっていて、その空欄(『内)に自分がどう発言するか自由に書き込むようになっていた。

引用文献

- 熊取谷 哲夫 (1991). 日本語における「感謝」の談話構造と表現配列—「すみません」と「ありがとう」の場合
広島大学日本語教育学科紀要, 1, 61-67.
- 蔵永 瞳・樋口匡貴 (2011). 感謝の構造—生起状況と感情体験の多様性を考慮して— 感情心理学研究, 18, 111-119.
- 沼崎 誠・工藤 恵理子 (2003). 自己高揚的呈示と自己卑下的呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果—実験室実験とシナリオ実験との相違— 実験社会心理学研究, 43, 36-51.
- 岡本 真一郎 (1992a). 感謝表現の使い分けに関与する要因 人間文化 (愛知学院大学人間文化研究所), 6, 95-105.
- 岡本 真一郎 (1992b). 感謝表現の使い分けに関与する要因 (2)—「ありがとうタイプ」と「すみませんタイプ」はどのように使い分けられるか— 愛知学院大学文学部紀要, 22, 35-44.
- 佐久間 勝彦 (1983). 感謝と詫び 水谷修 (編) 話し言葉の表現 講座日本語の表現 3 (pp.54-66.) 筑摩書房
- 塩田雄大 (2012). 現代人の言語行動における“配慮表現”～「言語行動に関する調査」から～ 放送研究と調査, 62 (7), 66-83.

